［第 22 回　常民文化研究講座］

民具を語る

民具を語る 4
日時　2018 年 7 月 23 日（月）14:00～16:00
会場　神奈川大学横浜キャンパス 9 号館 11 室（日本常民文化研究所）
発表　「原方刺し子の世界――ひと針に思いをこめて――」
　　遠藤きよ子（刺し子作家・日本手芸普及協会会員）

原方刺し子――一針一針に込めた思い

佐野　賢治

庶民にとって自ら手間暇かけて織り、また購入した布は、着物や布団地の役割を終えると、次なるさまざまな使用を経て、その後はおしめや雑巾として、最後にはほぐされ詰め物などの用を果たし終えた。庶民の衣料、衣生活に対する時代性、地域性を今回は、東北山形、米沢市の刺し子、「花ぞうきん」を題材にして語っていただいた。

刺し子とは、手芸の一分野で、布地に糸で幾何学模様等の図柄を刺繍して縫いこむことで、布に糸を刺すことによって少しでも丈夫に、そして暖かくという生活の知恵と、家族への愛情が作り出した手仕事のことである。東北地方は、ことに木綿栽培には向かず古着などが北前船でもたらされた。この綿布や麻布に施された、津軽こぎん刺し、南部菱刺し、庄内刺し子という庶民の刺し子が知られている。

一方、山形県米沢には「花ぞうきん」と呼ばれる刺し子が伝えられている。この「花ぞうきん」は、関が原合戦敗戦後、会津 120 万石から米沢 30 万石に、最終的には 15 万石に減移封された上杉家とともに移り住んだ武士「原方衆」たちが半農半士を余儀なくされ、その妻たちが、着るものもままならない貧しさの中で、布に糸を刺して繋ぎ合わせ重ね合わせて、丈夫に長持ちするようにと刺し子を施したことが始まりとされている。「花ぞうきん」は武士の妻の証として玄関に敷かれ、現代では「原方刺し子」として遠藤きよ子さんによって技術伝承がなされている。

写真 1　刺し子の作品

当日は、遠藤さん自身の語り、作品を通して手仕事の世界を聞い

た。体験が肝心と遠藤さんが持参された初心者用にラインのひかれた布切れを相手に、参加者は四苦八苦しながら糸刺しに取り組んだ。現在、刺し子には民芸的な関心が新たに注がれているが、その背後にある一針一針の重みを実感する機会ともなった。

写真２　遠藤きよ子氏の発表

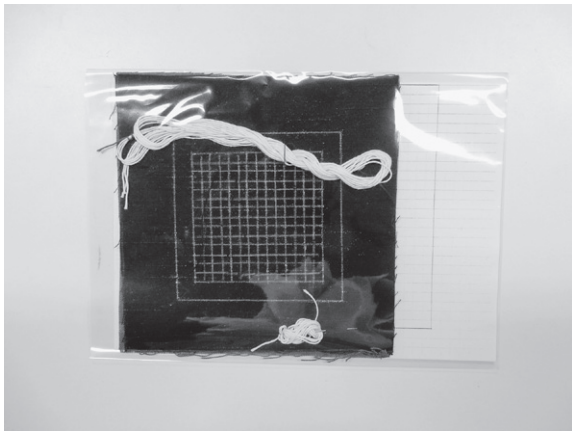

写真３　図案が引かれた初心者用の刺し子生地と糸

写真４　線をもとにひと針ずつ刺していく

写真５　原方刺し子の基本を遠藤氏の指導を受け実践

写真６　講座風景